

## 京都で発行された本邦最初の新聞について

松田 清

### はじめに

従来、本邦で発行された最初の新聞とされてきたのは、幕府の洋学研究機関蕃書調所が文久二年正月に、ついで蕃書調所改め洋書調所が同年二月に発行した木活字版『官板バタヒヤ新聞』である。小野秀雄<sup>①</sup>および鈴木秀三郎<sup>②</sup>の先駆的研究によれば、この新聞はバタヴィアのオランダ領東インド総督府発行の海外情報新聞『*Javasche Courant*』の一八六一年八月三十一日号から同年十一月十六日号までを蕃書調所の蘭学者たちが抄訳したもので、全二三巻からなる。各巻木活字版和綴じ半切五枚から十枚前後の小冊子である。御用書林老皂館萬屋兵四郎が販売した。

筆者は二〇一一年六月から二〇一三年三月まで、京都の本草漢学塾山本読書室旧跡の伝来資料を調査するなかで、『*Model van een nieuwsblad of sinbunshino utssi. 1862 1sten jan : t' mizac.*』(「モデル・ニュースブラットの見本または新聞紙の写し 一八六二年一月一日 於ミヤコ、の意」というオランダ語のタイトルと刊記をもつ一枚の邦字新聞を見出した(写真1)。以下、『新聞紙の写し』と略称する。山

本亡羊より読書室を引き継いだ二男山本榕室(一八〇九―一八六四)の来簡類を納めた箱の中に折り畳まれていたものである。

和紙一葉(縦二四〇ミリ、横三三三ミリ)の片面に四周単辺の匡郭を施し、上部の匡郭内に細い界線で仕切られた横一行分の空間に上記のオランダ語タイトルが筆写体を模した製版で印刷されている。本文は木活字版で縦一段組み、三八行からなり、漢文脈の漢字仮名交じり文である。本文の中央上部にはオランダ語タイトルに接する四角の枠内に無人島の略図が挿入され、説明は略図内に「無人寫周回之里数」「南嶋廿七度 十里」「北嶋 廿七度半 十五里」などとやはり木活字で組まれている。

発行日はオランダ語の刊記通りであれば、文久元年二月二日に当たるが、邦字の本文の三行目に、ひととき大きな活字で「大日本国文久二年壬戌正月元日刻出」とあるのが実際の発行日と思われる。これは西暦一八六二年一月三〇日にあたる。

編集発行者は誌面の末尾に「蟻衣翼中活字于酒母楼」と謎めいた戯名を使用し、梵字らしい印文の印記を添えているが、オランダ語のタイトルを掲げ、本文中で天文暦学、理学、膳所藩の洋学事情を

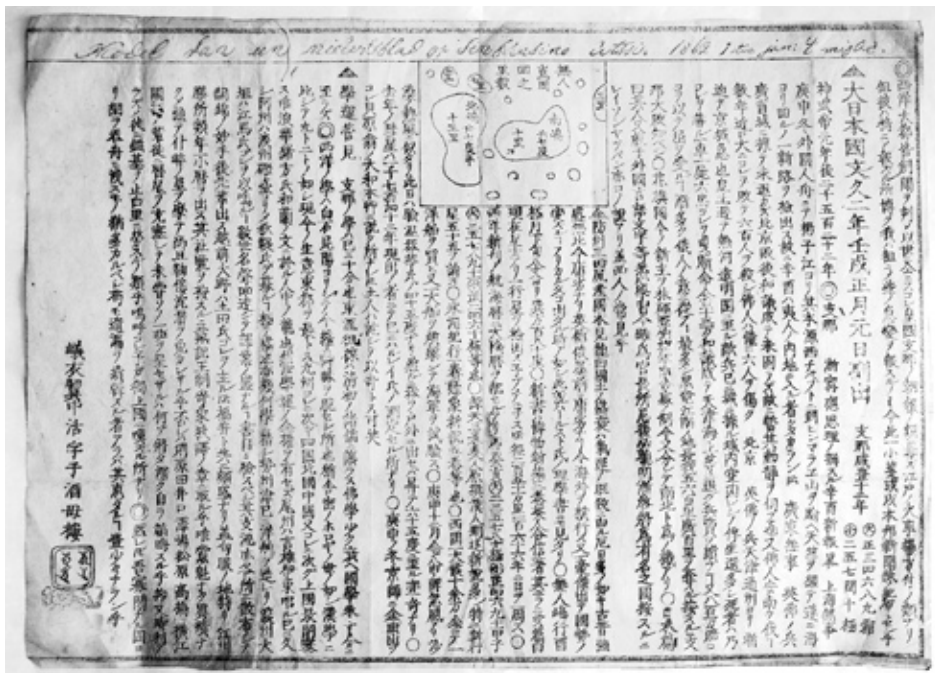


写真1 Model van een nieuwsblad of sinbunshino utssi. 1862 山本読書室資料より

論じていること、「酒母」は酒麴を意味し、「酒母楼」はコウジロウとの読みが可能であることから、嘉永初年にデフォー『ロビンソン・クルーソー』の本邦初訳『漂荒紀事』を著した膳所藩の蘭学者黒田行次郎（一八二七〜一八九二）が編集発行者と推定される<sup>(5)</sup>。酒好きの行次郎は麴廬の号を持ち、天文暦学の知識は膳所藩饗養遵義堂の頭取であった父黒田梁洲（一七九二〜一八五七）から受け継いでいた。晩年には梵学と英語の知識を生かし、東本願寺翻訳局のためにウィルソン H.H. Wilson の英訳『リグ・ヴェーダ』を翻訳している<sup>(6)</sup>。

本稿は黒田麴廬が京都で発行した本邦最初の新聞について、記事内容の分析を通して、成立過程を解明しようとするものである<sup>(7)</sup>。分析に当たっては、記事の構成が内容的に、（一）導入（発刊の辞と発行年月日）、（二）海外情報、（三）天文暦学・理学記事、（四）洋学の現状、の四部立てとなっているので、この区分にしたがって、本文を順に翻刻引用し、引用ごとに注解または考察を加えることとする。翻刻にあたっては、原則として漢字を現代通行の書体に改め、ノ、フ、伝はそれぞれシテ、コト、ト云に直した。印刷不鮮明で判読出来ない文字には□を用いた。なお、漢文資料の引用に当たってはできる限り原文の書体を尊重した。

## （一）導 入

◎西洋大都皆創開ヲ刻シテ以世ニ公ニスコレ皇国支那ノ朝報

ノ類ニ非ズ江戸ノ火事場方付ノ類ナリ但彼ハ精ニシテ報ズル所  
博ク我ハ粗ニシテ些ノ急変ヲ報スルノミ今此一小箋或以本邦新  
聞紙ノ起源トセン乎

「創聞」は他に用例を見出し難いが、「創」は創意、創見の  
「創」と同じく「新しい」の意味であり、「創聞」は新聞と同義であ  
ろう。「皇国支那」は日本と中国を指す。「朝報」は清朝の官報の名  
称であり、京報ともいう。「火事場方付」は火事場の焼失図のこと  
であろう。櫻痴居士（福地源一郎）の『新聞紙実歴』（明治二七  
年）に、「十八歳にて江戸に來り（安政五年）遊學したりけるが其  
頃世上にて読売と唱へて官員の黜陟<sup>おとがへ</sup>または火事場の焼失<sup>ほうかく</sup>図もしくは  
は流行唄を刊行して売行きたるが如きは今日より考ふれば即ち不定  
期刊行の新聞紙の如きとも云ふべき歟」とある。「彼ハ精ニシテ報  
ズル所博ク」とあるので、麴廬は西洋の新聞について具体的な知識  
を持っていたと思われる。麴廬は本文中に「レイソンヤツパン」即  
ちオランダ商館長レフィスゾーン（J.H. Leysshon、一八〇〇～  
一八八三）が帰国後、欧米の新聞雑誌の日本関係記事を渉獵して著  
した『日本雜纂』（*Bladen over Japan, 's Gravenhage, 1852*）を引用  
しているの、あるいはこの書物から「西洋大都」の新聞の知識を  
得たかも知れない。レフィスゾーンは、米紙 *New-York Courier*  
and *Enquirer*、英紙 *Times*、仏紙 *Journal des Débats*、蘭紙  
*Handelsblad* などを引用している。

『官板バタヒヤ新聞』は題簽に「官板バタヒヤ新聞 文久二年正月刊」、

版心に「バタヒヤ新聞卷一 文久二年正月刊」などとあるので、  
正確な発行日は不明であるが、「今此一小箋或以本邦新聞紙ノ起源  
トセン乎」という麴廬の控え目な表現には、「本邦新聞紙ノ起源」  
をなすものの自負を読み取ることが出来る。

#### ▲大日本国文久二年壬戌正月元日刷出 支那咸豐十二年

（大）正三四六八九箱 神武帝元年後二千五百二十二年  
（小）二五七四十極

膳所藩饗順義堂教授であつた高橋正功（まさかつ、通称作也、号  
坦堂）の藩費日誌「学政雜録」（嘉永四年～元治二年の記録、大津  
市歴史博物館所蔵）によつて文久二年にいたる麴廬の動向を追うと、  
これより十年前の嘉永五年七月三日、学問師範を命ぜられて以降、  
二月と八月の積業には毎回、父梁洲、正功とともに掛役を勤めてい  
る。安政三年四月九日には蘭学師範に取り立てられ、翌年三月八日  
父梁洲の隠居に伴い家督六〇石を引き継いだ。閏五月二五日には梁  
洲が死亡している。

「学政雜録」からは蘭学師範の勤務内容を窺い知れないが、三〇  
歳で蘭学師範となつた安政三年から明治二五年六六歳で亡くなるま  
で休みなく書き継いだ「訳業日乗」（京都大学附属図書館所蔵）に  
よつて、藩費における麴廬の講義内容を探ると、文久初年までは孝  
経などによる漢学講義が中心であり、オランダ語教授に関しては、  
文久元年九月三日に初めて「講堂西洋学発会四人」の記載が現れる。  
以後文久二年一月末まで、「出堂西セリ」「出堂西童セリ」などの語

句が頻出する。それぞれ、講堂で西洋学を教えた、講堂で「西童」を教えた、の意味に解釈できる。「西童」とは幕末蘭学塾の教科書として流布し、当時「ヘンチーヤンチー」と呼ばれた理科教科書<sup>1)</sup>、*Buijs, Natuurkundig schoolboek*. 1845であろう。先生と二人の男子生徒ヘインチェ (Heintje)、ヤンチェ (Jantje) との間答体教科書である。「訳業日乗」のタイトルに似合わず、この日誌に訳業の記録は希であり、内容はむしろ生活日誌であるが、文久元年一月九日には「280ゼーアール」の語句が見える。「ゼーアルチルレリー」などと呼ばれたカルテン『海軍砲術指導書』J.N. Callen, *Leidraad bij het onderrigt in de zee-artillerie*. 1842の原文ページを示すものと推定され、当時の麴廬の研究内容を窺わせる。

「訳業日乗」は生活日誌であるため乱雑な文字で書かれ、読解が極めて難しい。この新聞に関係すると思われる記事は、わずかに文久二年二月一九日に「狂庵来ル 一片ノ新聞紙ヲ以」という語句を見出したにすぎない。狂庵なる人物は不明である。一方、「学政雑録」の同年四月一八日には「黒田行次郎罪あり悉く其諸役を櫛ぐ」(原漢文)とみえ、何らかの事件で麴廬は処罰を受けたことが分かる。

「訳業日乗」ではこの日付を大圏で囲み、「四月十八日 家累ヲ生ズ 大ナルコト相済」「俄ニ山口ヲ頼ミ相済」と書き付け、翌日には「江戸状山口ニ頼」と見える。罪により諸役を解任された麴廬は家族の養いに窮し、山口なる人物に江戸への書状を託したようである。慶応三年三月の麴廬自筆の黒田家由緒書は以下のごとく淡々

と書かれており、そのような窮状を窺い知ることにはできない。

文久二庚戌四月十八日御役儀御免御馬廻格被仰付候  
同年五月十五日開成所出役教授手伝御差出被成候様被仰渡候ニ  
付江戸表江罷下開成所江罷出候様被仰付候依之従公辺出役中金  
拾両拾五人扶持被下置候<sup>2)</sup>

「五月十五日開成所出役<sup>3)</sup>」の幕命について「学政雑録」は「黒田行次郎大府の辟命に應じ東府に赴き訳局之員に備ふ」(原漢文)と記しているが、「訳業日乗」では「十五日 公儀召召ニ来ル」との文末に感嘆符！を何重にも付け足し、さらに「発揚蹕蹕<sup>4)</sup>」(興奮して飛び回る、意)の四文字を大書して繰返し記号を重ねている。このわずか四日前、五月一日の条に「大船ヲ製セヨト云 我邦ノ法ニテ三□カ十□デモ 又邪宗ヲ□トスルコト 西学ヲ禁スルコト 神国ト云コト 全体愚論ノ極也」という激しい言葉を書き付け、おそらく自分を窮状に追い込んだ藩内の反対勢力に対する怒りを吐露しているだけに、幕府からの通知に接した麴廬の喜びはいかばかりであったらう。この年の「訳業日乗」の表紙には「蕃書出役 五月十五日」の文字が朱筆で大書されている。

## (二) 海外情報

◎支那 浙寧応思理ノ撰スル辛酉新報畧 上海無事庚申冬外国



人舟ニテ揚子江ヨリ其本源西チベツトニ到ヒンマラエ山ヲ踰ヘ  
 天竺ヲ経テ遂ニ海ヨリ回ルノ一新路ヲ検出ス故ニ辛酉ハ夷人ノ  
 内地ニ入ル者多カラント云 広東無事 英仏ノ兵広省城ニ拠テ  
 未退カズ北京敗後和議成テ未固ラズ故ニ暫其動静ヲ伺フ也又仏  
 人安南ヲ伐コト数年近口大ニコレヲ敗テ六百人ヲ殺シ仏人ハ僅  
 ニ六人ヲ傷ク 北京 英仏ノ兵天津通州ヨリ漸迫テ京城急也皇  
 上避テ熱河遠明園ニ至ル敵兵已ニ城ニ拠ル城内皆囚レシノ俘生  
 還多シ死者ハ乃コレヲ葬ル一車一屍六馬コレヲ曳贖命全三十三  
 万和議成テ天津海上等ニ退ク兵費ヲ贖フコト又八百万賠ココヲ  
 以テ屈ヲ受ルコト漸多ク俄人ノ意ニ從フコト最多シ黑竜江南ノ  
 地長我五六百里広百里ヲ奪ハル按スルニ支那大敗知ベシ○花旗  
 国今ノ新主ヲ林礪亞伯拉罕ト云合衆ノ制今又分レテ南北ト為ノ  
 機アリ○□□篇曰其人又能于外国言語文字等悉心学習今雖為官  
 長所忌後必聡明漸啓將為有名之國按スルニレイソイヤツパン亦  
 コノ説アリ蓋西人ノ常見乎

「浙寧」は浙寧、浙江省の寧波（ニンポウ）、「応思理」はアメリカ長老派教会宣教師インズリー（Elias B. Inslee, 1822-1871）の中国名である。インズリーは寧波で発行された華字新聞『中外新報』（1854-1861、不定期刊）の二代目編集者であり、初代編集者はマグフン（Daniel Jerome MacGowan, 1814-1893、中国名、瑪高温）であった<sup>(9)</sup>。

「浙寧応思理ノ撰」という表現は、蕃書調所が安政六年から刪定

翻刻を開始した訓点本『官板中外新報』全一三冊（製版、一二冊現存、第九号欠<sup>(1)</sup>）のうち、第二号、第二卷第一号、第四号、第六号、第七号、第八号の巻頭第二行に「浙寧応思理撰」とある形式に依拠しており、寧波で発行された華字新聞『中外新報』にはそのような表現形式は見られない<sup>(12)</sup>。したがって「浙寧応思理ノ撰スル辛酉新報畧」は、『中外新報』ではなく、『官板中外新報』の辛酉年（文久元年）版の略、を意味する。

長崎大学武蔵文庫所蔵の「辛酉新報畧中之説」と題する一枚の写真<sup>(13)</sup>（写真2）は麴廬の編集過程を示す重要な資料である。この断簡は「広東ノコト」「北京ノコト」の小見出しをもつ段落、「○花旗国（左ルビ「ワシントンノコト」）で始まる段落、「西国一大候<sup>(14)</sup>」云々の段落から成り、検討の結果、麴廬の自筆と判断された。それぞれ右に掲げた『新聞紙の写し』『辛酉新報畧』の記事の草稿と見なすことが出来る。ただし、「辛酉新報畧」自体の編者が麴廬自身であるかどうかは未詳である。

次に、『新聞紙の写し』にみえる「辛酉新報畧」からの引用文の典拠となった『官板中外新報』の対応する文章を掲げ、「辛酉新報畧」が利用した箇所を傍線で示そう<sup>(15)</sup>。（…）は引用者による省略を示す。原文の訓点、ルビ、地名・国名等に付された二重傍線は便宜上省略した。また、読点も適宜省略した。

中外新報第十二號

一千八百六十一年、咸豐  
 十一年正月初一日刊、

（…）

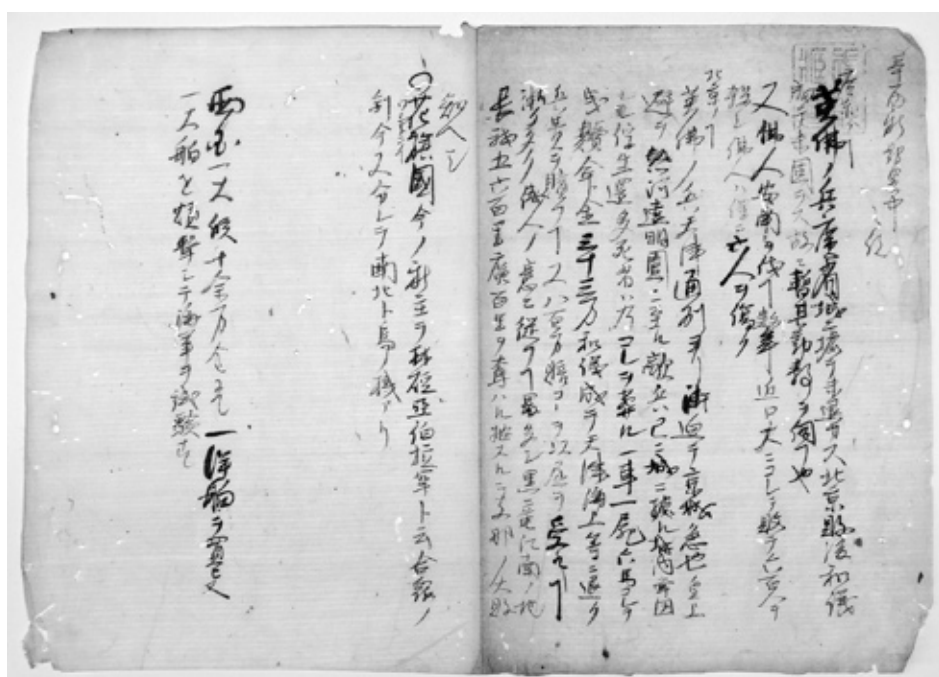


写真 2 辛酉新報署中之説 長崎大学武蔵文庫新発見資料 No. 266 長崎大学附属図書館経済学部分館所蔵

## 上海

上海近處雖有長毛、要皆太平無事、惜內路生意甚少、外國人有私與長毛通商者、亦有人長毛所據之地者、然皆係長毛所延入、去年冬有一隊外國人、新立一公會、以船駛入洋子江、經南京至漢口、直窮至洋子江發源之處、即西藏踰喜馬拉山是山乃西藏天山分界之處以至天竺、及返之日乃以火輪船由海上紆道而回、一切路費皆由公會出、此路外國人昔日未曾經行、今則始得歷之、予知今年必多有外國人、入中華內地、因和議已成故也、

## 廣東

廣省近亦太平、商賈貿易頗盛、又有避長毛之患者、入而居之、其城仍為英佛二國兵所據不知退于何時、然皇上苟踐約不爽、自當速退、

又香港一處、人烟稠密、又多有難民遷入、以避長毛、以為此地較他處為安、又英兵自北京回者、又多至其地、意以和議雖成、皇上踐約與否、尚未可知、故暫寓之以觀動靜、至于佛兵則多至安南國、因昔年構戰之事、尚未了局、今將以大兵滅其全國、近聞佛人已與安南人戰、安南人敗績死者六百人、佛人僅傷六名、

## 北京

去年秋、英佛二國、攻入天津、至通州後、京城告急、皇上避至熱河遠明園、是園離京城約三四里、乃皇上外宮也御用寶物、盡行搶散、後迫京城、京城大啓、遂為英佛兵所據、先是在通州時、有英人樹白旗者二十人、曾為滿兵所獲至是生還者、約大半、其餘盡歸死屍、英人怒焚遠明園、將死屍于俄羅斯墓地、葬時以六馬牽一車、一車

載一屍、二國兵送葬者數千、後恭親王<sup>皇</sup>出行和議、議成、二國兵遂退至天津、亦有退至上海香港等處、今在天津者、止有三千、内有數百人、屯大沽江口砲臺<sup>江口砲臺、共有五座、其四座、已爲外國兵所毀、</sup>待兵費八百萬賠償完結、始還天津、八百萬外、又有三十三萬、償樹白旗者已死之命、(…)又俄羅斯亦于九月間續增和議、所增者較英人更多、因俄近中華故較他國尤先一步、前年俄曾以砲八百門易黑龍江北大地、近又取黑龍江南濱海之地、長二千七百餘里、廣約六百里、

(…)

#### 花旗

花旗舊主之任已滿今又冊立新主、姓林硯名亞伯拉罕、是人籍貫本在花旗南方、南方人好買黑奴、北方人不悅、今是人亦不喜買黑奴、與北方人同意、因此南人大惡之、今聞南人欲與北人分國、而北人則聽從其便、予思南人苟自立一國而南方四百萬之奴、必逃至北方矣、(…)

寧波で発行された『中外新報』の編集方針はキリスト教教義を宣伝し、寧波および他の四つの対外開放港（上海、広東、福州、厦門）、英植民地香港、主要都市（北京、天津など）のニュースを伝え、国際ニュースでは「花旗」（米国）の国益を重視しするものであったが、『官板中外新報』はキリスト教関連の記事や語句を削除あるいは修正した刪定版であった。<sup>16</sup> 麴廬はその第一二号（辛酉年、一八六一年刊行）のダイジェスト版「辛酉新報畧」を利用したので

あった。

第一二号は、第二次アヘン戦争（アロー戦争、一八五六―一八六〇）の最終局面、一八六〇年の英仏連合軍による北京侵攻（九月）から北京条約締結（清英・清仏は一〇月、清露は十一月）にいたるまで、各地の出来事を「長毛」（長髮賊、太平天国の反乱軍）の動向も交えて報じている。漢文の原文に照らしながら「辛酉新報畧」に適宜、注解と考察を加えよう。漢文は読み下しではなく、現代語訳（拙訳）によって引用する。

「上海無事」は、原文に「上海は近辺に長髮賊がいるけれども要するに皆太平無事である。残念ながら内陸の道路は安全と思われる道路が大変少ない。外国人の中には長髮賊と密かに商売をしているものもあれば、長髮賊の占拠地に入るものもある。しかし、皆長髮賊の引き入れによるものである。」とあるのを、長髮賊関連を完全に無視したものである。

「庚申冬外国人舟ニテ揚子江ヨリ其本源西チベットニ到ヒンマラエ山ヲ踰ヘ天竺ヲ経テ遂ニ海ヨリ回ルノ一新路ヲ検出ス故ニ辛酉ハ夷人ノ内地ニ入ル者多カラント云」に対応する原文には、「去年冬、外国人の一グループがひとつの組合を作って船を揚子江に走らせ、南京を経て漢口に至り、直ちに揚子江の水源地であるチベットに到達し、ヒマラヤ山を越えインドに至った。返る日となつて、火輪船で海上を迂回して還った。旅費はすべて組合が出した。この経路は外国人がこれまで一度も行つたことがなく、今回初めてたどることが出来た。必ずや今年は多くの外国人が中国内地に入るはずである。

すでに和議が成立したためである。」とある。これは「和議」すなわち北京条約と同時に一八五八年の天津条約が批准され、外国人に揚子江の自由航行と内地旅行が認められた新事態を伝える記事である。揚子江を遡りチベット、ヒマラヤを経由して回航した外国人グループについては未詳である。

「広東無事 英仏ノ兵広省城ニ拠テ未退カズ北京敗後和議成テ未固ラズ故ニ暫其動靜ヲ伺フ也」に対応する原文を以下に訳そう。

「近頃はまた平和となり、商人の貿易がかなり盛んである。長髪賊からの被害を避けて多くの人々が来住している。したがって広東城内は英仏二国の軍隊が占拠しており、いつ退却するか分からない。皇帝が約束を実行しさえすれば、いつか分からないが、おのずから速やかに退去するはずである。また、香港というところは人家が稠密であり、難民の流入が多い。これは長髪賊を避けてのことである。思うにこの地は他所と比べて安全である。また、英兵で北京から回つてこの地に来た者が多い。どうも和議が成りがたく皇帝が約束を実行するかどうかまだ分からないので、暫くここに留まって動靜を観察しているらしい。」

ここでも長髪賊のことはやはり無視し、香港の記事と広東の記事を区別していない。皇帝の約束とは北京条約第三条に規定する、英仏に対する各八百万両の償金の支払いのことであり、英仏は支払い完了まで軍隊を留置することを条件としていた。

「又仏人安南ヲ伐コト数年近口大ニコレヲ敗テ六百人ヲ殺シ仏人ハ僅ニ六人ヲ傷ク」の原文には、「仏兵はいえば多く安南に行つ

ている。昔に戦鬪を構えたことがあったが終局しなかったので、今回大軍をもって全国を滅ぼそうとしている。近聞によれば、仏軍はすでに安南軍と戦い、安南軍は敗れて死者六百人に達した。仏軍はわずかに負傷者六名だけである。」とある。ここで問題となっているフランスの二度にわたるベトナム侵攻は、一八五八年九月から一八六〇年三月にいたるダナン攻略と、北京条約締結後、中国からベトナムへ回航したフランス艦隊によるサイゴン攻略を指すものと思われる。

「北京 英仏ノ兵天津通州ヨリ漸迫テ京城急也皇上避テ熱河遠明園ニ至ル敵兵已ニ城ニ拠ル城内嘗囚レシノ俘生還多シ死者ハ乃コレヲ葬ル一車一屍六馬コレヲ曳贖命全三十三万和議成テ天津海上等ニ退ク兵費ヲ贖フコト又八百万賠」に対応する原文は以下の通り。

「去年秋、英仏二国が侵攻して天津に入り通州に達したので、北京城は急を告げ、皇帝は避難して熱河に至った。遠明園（この庭園は北京城から約三、四里離れた皇帝の離宮である）の御用の宝物は略奪により悉く散逸してしまった。その後、北京城は圧迫を受けてすっかり開門し、ついに英仏軍に占拠されてしまった。これより先、通州でイギリス人二、三十人が白旗を掲げて降伏し満州兵に捕獲されてしまっていたが、ここに至って大半が生還した。その他の者はすべて死体となって帰ったため、イギリス人は怒って遠明園を焼き払った。死体を送ってロシア人墓地に埋葬するとき、六頭の馬で一台の車を引き、一台の車に一体を載せた。二国の兵隊数千人が葬送した。その後、恭親王（皇帝の弟）が出てきて和議を行った。和議



が成立すると両国の軍隊はついに退却して天津に至った。また上海、香港などに退却したものもある。今天津に留まっている兵は三千人で、そのうち数百人は大沽海口の砲台（全部で五座ある内四座はすでに外国兵によつて破壊されている）に駐屯している。軍費八百万両の賠償完結を待ってはじめて天津に還った。八百万両のほかに三三万両がある。白旗を掲げたにもかかわらず失われた命の賠償金である。」

熱河は清朝の歴代皇帝の避暑地である。英仏軍が北京に迫るや咸豐帝は一八六〇年九月二日、円明園から熱河に遷った。原文は円明園を「遠明園」と表記し、その場所を誤って熱河としている。またイギリス人が円明園を焼き払ったとしているが、英仏同盟軍とりわけフランス軍が円明園を略奪破壊したのは同年一〇月七日・八日であった。これより先、イギリス全権大使エルギン伯の補佐官兼通訳ハリ・パークスが通州近くの張家湾で捕虜となったのは同年九月一八日であった。パークスと離れた一行二三人も後に捕虜となり、虐待を受けて生き残ったのはインド騎兵八人のみであった。<sup>17)</sup>

「ココヲ以テ屈ヲ受ルコト漸多ク俄人ノ意ニ從フコト最多シ黒竜江南ノ地長我五六百里広百里ヲ奪ハル按スルニ支那大敗知ベシ」は、対応する原文「ロシアもまた九月になると和議（引用者注、天津条約を指す）の条項を増補した。増補はイギリス人よりもさらに多い。ロシアは中国に近いので他国に一步先んじた。前年、大砲八百門と黒龍江の北の大地を交換し、近頃また黒龍江の南の瀕海の地、長さ約二千七百余里、横五六百里を取得した。」と比較すると、大きく

乖離している。原文はロシアが一八六〇年一月締結の北京条約によつて、黒龍江以北のロシア領を認めさせ、黒龍江以南の沿海州を割譲させたことを伝えているが、「辛酉新報畧」の筆者は事実を伝えるよりはむしろ、支那の英仏に対する大敗とロシアに対する屈従を読者に印象づけようとしている。

「○花旗国今ノ新主ヲ林礪亞伯拉罕ト云合衆ノ制今又分レテ南北ト為ノ機アリ」に対応する原文は、「花旗の旧国主の任期が満了したので今また新国主が任命された。姓は林礪（原左ルビ、リンコルン）、名は亞伯拉罕（原左ルビ、アブラハム）という。この人は本籍がもと花旗の南部にある。南部人は好んで黒人奴隸を買う。北部人はこれが不満である。今この人もまた黒人奴隸を買うことを喜ばず、北部人と同意見である。このため南部人は彼を大いに憎んでいる。今聞くとところによれば、南部人は北部人と国を分けようとしており、北部人もこれに便乗しようとしている。私が思うに、南部人がもし自分の方から独立するならば、南部の四百万人の奴隸は必ず北部へ逃げるであろう。」となっており、「辛酉新報畧」の筆者は南北対立の原因たる黒人奴隸問題を省略している。

海外情報 of the 最後に位置する「○○○○篇曰其人又能于外国言語文字等悉心學習今雖為官長所忌後必聰明漸啓將為有名之國按スルニレイソニヤツパン亦コノ説アリ蓋西人ノ常見乎」なる文章はアブラハム・リンカーンに関する引用と思われるが、「○○○○篇」の木活字二文字が印刷不鮮明のため典拠が分からない。引用を読み下せば、「曰くその人また外国の言語文字等を能くし心を悉して學習す。今

官長の忌む所となるも、後必ず聡明漸く啓け將に有名の国たらんとす。」となる。「レイソンヤツパン」は先に言及したようにレヒスゾーン『日本雜纂』J.H. Leyssohn, *Bladen over Japan*, 1852であるが、「コノ説」の該当箇所は判明しない。

### (三) 天文曆学・理学記事

▲防州三田尻産国本見龍曰国土ノ盛衰ハ氣運ノ旺殺ニ由ル厄日多ノ如キ古昔強盛無比今庸劣ナリ英仏俄墨前ニ庸劣ナリ今海外ヲ横行ス又一豪傑出テ国勢ノ変ズルコトアリカルタゴ出タル時ノ如シ此説ハールスト氏ノ理学書ニモ見タリ

「防州三田尻産国本見龍」なる人物は天保一四年（一八四三）に麴廬の父梁洲のもとに寄寓した国本謙良であろう。麴廬の『増補西洋事情附録』（一八六八）の題言に、父梁洲は青年時代に蘭学を志すも周囲の反対により儒学に進み、臆所藩校の教授となったが、蘭学の「訳書ヲ見頗ル多シ問纂輯シテ書ヲ作ル者アリ就中天保癸卯「十四年」ノ歲国本謙良防州三田尻ノ産来寓問其所説ノ蒸氣新炮ヲ筆記ス（…）国本氏ハ吾ガ師也才名夙ニ発ス惜哉早ク没ス」とある。麴廬の「博物新志」によれば、国本は「吾友国本氏一奇巧家ニ就テ」蒸氣砲を試作したが量産できなかったという。<sup>(18)</sup>森川潤「萩藩医坪井信道——萩藩における蘭学導入の経緯について——」<sup>(19)</sup>（二〇一一）は坪井信道入門者として「防州宮市の国本見龍」を挙げている。

「一豪傑出テ国勢ノ変ズルコトアリカルタゴ出タル時ノ如シ」とは、第二次ポエニ戦争において、ハンニバルがローマを攻略するために紀元前二一八年にイベリア半島のカルタゴ・ノヴァ（現カルタヘナ）を出発したことをいうか。「此説」を述べているという「ハールスト氏ノ理学書」の候補として、リュスト『産業技術概説』Wilhelm Armandus Rüst, *Grundriss der Technologie*, Berlin, 1844, の蘭訳書 W.A. Rust, *Schets der technologie*, Gouda, 1847を国会図書館所蔵江戸幕府旧蔵本（蘭1833）によって調査したが、該当箇所は見当たらなかった。原書の確定は後考を待つ。

○無人嶋行西極月下旬八丈ヨリ巽方百八十里

「無人嶋」は小笠原諸島（Bonin Islands）を指す。「西極月」すなわち文久元年一二月（一八六二年一月）、外国奉行水野忠徳の一行が咸臨丸で小笠原に派遣されている。ただし、本文中央上部の無人嶋略図に印刷された「南嶋廿七度 十里」「北嶋 廿七度半 十里」などの緯度と島周りの里数は林子平の無人島図（天明五年、須原屋市兵衛梓）によるものである。子平図には「二十七度半 北ノ嶋ト云廻リ十五里、又本嶋トモ云」「二十七度 南ノ嶋ト云廻リ十里」などとある。<sup>(20)</sup>「八丈ヨリ巽方百八十里」の典拠は未詳。

○新書ハ博物新編三卷英人合信著其ユラニユス篇曰現在星士アリ一行星ヲ検出ス子ブチユ子スト云徑二百五十万里一百六十六

年二日ヲ一周ス

合信著『博物新編』二集「ウレヌス ユラニウス星論」の末尾に「現在に星士有り、新たに一行星を窺う、此星「ウラヌス」引用者注」に比ぶれば尤も大にして尤も遠しとす、新たに名づけてデフューズ星と曰う、直径一百五十万里、地球より大なること二百五十倍、百六十六年に日を廻りて一週す、其余は未だ知るを得ざるなり」(原漢文)とあり。星士は天文学者、行星は惑星のこと。本文の「二百五十万里」は「一百五十万里」の誤植である。

西洋新刻ノ航海曆ニ太陰曆ヲ配セルアリ即癸亥(大)二三五七八十極(小)正四六九十一甲子(大)三六七八九十一(小)正二四六十極等也

干支と大小の月の特徴から、「癸亥」は文久三年(一八六三)、「甲子」は元治元年(一八六四)に当たるところから、「西洋新刻ノ航海曆」の候補として Jacob Swart, *Almanak ten dienste der zeeleden voor het jaar 1863* [1864]. Amsterdam, Med. G. Hulst van Keulen, 1860 [1861]. が候補にあがる。しかし、この年版は国内の舶載蘭書として伝存しないため、今は確認できない。国会図書館所蔵江戸幕府旧蔵本の同書一八五七年版(蘭234)、一八五九年版(蘭235)、一八六〇年版(蘭233)、一八六五年版(蘭3174-3176)を見る限り太陰曆の記載はない。

○譚天三卷英人原撰漢人刪述新說多シ特ニ新行星五十五ヲ論ス

『譚天』(一八卷附表、一八五九、上海、墨海書館刊、上中下三冊)はイギリスの天文学者ハーシェルの『天文学概説』John F.W. Herschel, *Outlines of Astronomy*, 1851を宣教師ワイリー Alexander Wylie が漢訳し、李善蘭が編集した。題字「譚天」の裏には「咸豊己未仲秋墨海活字版印」の刊記、巻一の巻頭には「談天卷一 英国侯失勒原本 英国偉烈重力口訳 海甯李善蘭刪述」とある。「譚天三卷」とは三冊本の意。訳者の英文序文 Translation of Herschel's [sic] *Outlines of Astronomy* (A. Wylie, Shanghai, December, 1859) によれば、ワイリーの本書翻譯の目的はホブソンの『博物新編』を補い、創造主のより正しい理解を広めることであった。

『譚天』の「巻九 諸行星」は英語原本の Chapter IX. Of the solar system に対応しており、「諸行星」の「其微而難見、亦必窺以遠鏡者」として五五個の小惑星の漢訳名を列挙し(ただし第五五番目は無名)、「皆西国近代所測得者、凡此諸星、細推其行法、実繞太陽、故皆為太陽所屬星、然恐不止于此、或隱而難見者尚多、今姑就所已見者論列之」とする。「新行星」の語は漢訳の本文には見られない。五四個の小惑星の学名と漢訳名は英文序文の次ぎに掲げられた英漢術語集 Vocabulary of Technical Terms の「Asteroid 小星」項目に列挙されている。この術語集はワイリーが原書の Index を利用して作成したものと思われるが、この小惑星のリストは原書一八五一年版の Index には見られない。後の版からワイリーが追補した

ものであろう。

○氷海紀行一卷懸象新説五卷等也

「氷海紀行」は麴廬の『<sup>増補</sup>西洋事情附録』（慶応四年戊辰六月官許、皇都、林芳兵衛他）巻末の「黒田行次郎著述書目」に「氷海航記一卷」とあるものと、また『懸象新説』は同書目に「天象新説図入三巻」とあるものと同じか。懸象は天文、天象の意。

○西国一大候<sup>(マ)</sup>十余万金ニテ一洋船ヲ買ヒ又一大船ヲ煩撃シテ海軍ヲ試験ス

薩摩藩（藩主島津忠義）が万延元年二月、長崎において英国製内車式蒸気船天祐丸を二二八、〇〇〇（或二二〇、〇〇〇）ドルで購入したことを指すと思われる。「一大船ヲ煩撃シテ海軍ヲ試験ス」は未詳。

○庚申十二月念八申牌忽風アリ沙漠ノ熱風ニ似タリ此日ハ驗温器華氏ノ四十五度ナリ然ルニ戸外ニ出セバ昇テ六十五度ニ至ル亦一奇ナリ

「庚申十二月念八申牌」は万延元年二月二十八日（一八六一年二月七日）午後三時から五時の間にあたる。牌はもと古代中国で一十

ごとに付け替えた時計の駒を指す。麴廬はこの日「訳業日乗」に、「テルモメートル四十五度」「△夕七ツ沙漠ノ風ノ如ク緑熱ク俄二六十三度ニ及ベリ顔熱シ」と書いている。

○去年ノ彗星ハ一千七百四十二年現出ノ者ニテ已ニハルレイ氏ノ測定セル所ナリ

「去年ノ彗星」は日本では文久元年五月二〇日（一八六一年六月二七日）に現れたテバット Tebbutt 彗星<sup>(22)</sup>であり、麴廬は「訳業日乗」の五月二十四日に「スイ星初見」として、その図を書き入れ、「芒短シ」（六月一日）、「スイ星輪光ヨリ高ク芒甚短」（六月二日）、「スイ星瑤光消ニシヤ」（六月一四日）と観察を続けている。一七四二年の彗星は日本では寛保二年正月二二日（一七四二年二月二六日）に現れた<sup>(23)</sup>。この彗星について麴廬が「ハルレイ氏ノ測定セル所ナリ」とした典拠は未詳。エドモンド・ハレーが一七五八年末または一七五九年始めに出現すると予言した彗星は予言通り一七五八年二月二五日に出現し、ハレー彗星と名づけられたが、ハレーはこの彗星を見ることがなしに一七四二年一月二六日（寛保元年二月二〇日）に死亡している。

○庚申ノ冬京師ニ金虫出ヅコレ貝原翁ノ大和本艸ニ説ク所ナレトモ土人ハ詫シテ以奇トス可笑



万延二年辛酉正月、禁裏の庭で金虫が出現した。御所の紫宸殿で祈禱するために泊まり込んでいた東寺の僧侶が正月一二、一三日に発見し、山本榕室のところへ持ち込んだことから、榕室はこれを鑑定して「金蟲考」を著し、『大和本草』をはじめ多くの本草書の記載について、キンチュウとコガネムシの区別を判定している。<sup>26)</sup> 麴廬が「庚申ノ冬」すなわち万延元年の冬としているのは正確ではない。金虫出現のニュースを載せたこの新聞が榕室の来簡とともに見つかったことは、麴廬と榕室の何らかの交流をうかがわせる。麴廬の記事から、当時、珍しい金虫の出現が京都で評判になったことが分かる。

#### (四) 洋学の現状

▲学運管見 支那ノ学ハ已二十分也東涯徂徠ハ清初ノ諸儒ニ譲ラス仏学少ク衰ヘ国学未十分ニ至ラズ◎西洋ノ学ハ白石昆陽ヨリシテ今纔ニ艸味ヲ脱セシ所也猶含密ノホロギノ世ノ如シ漢学ニ比シテ九ト二トノ如シ

東涯徂徠を清初の諸儒に並ぶものとする評価は麴廬独自の見解か、折衷学派といわれる猪飼敬所の門人として藩學遵義堂頭取を勤めた父梁洲や遵義堂で漢学教授の同僚であった高橋坦堂作也らと共有した見解なのか。この問題は今後の検討課題としたい。

「支那ノ学ハ已二十分也」との宣言は遵義堂蘭学教授としての立

場表明と思われる。「仏学少ク衰ヘ国学未十分ニ至ラズ」との言葉からは、梵学や蘭学の知識を得ていた麴廬が当時の仏教学、国学に対して不満を懷いていたことが推測される。

天保一四年（一八四三）一七歳で大坂の緒方洪庵に、弘化四年（一八四七）二二歳で京都の広瀬元恭に、または嘉永四年（一八五二）二五歳で江戸の伊東玄朴に入門した麴廬はこの年文久二年、三六歳。己に恃むところがあつたのであろう、成長の尺度を学問に当てはめ、成熟した漢学の十分の九に比して未発達洋学の現状は十分の二とする。比喩に用いている「含密ノホロギノ世」は未詳。

現今ノ生意東都ヲ最トス九州コレニ次ギ四国北国中国又コレニ次グ上国最閉塞ス唯浪華緒方氏和蘭ノ文ニ於ル人中ノ龍也然レドモ学運ノ全権ヲ有セズ

「現今」とは蘭学の流行が全国に拡大した安政年間から文久にかけてであろう。蘭学の「生意」すなわち活気は江戸を最高とする。

九州は佐賀藩、薩摩藩、福岡藩、四国は土佐藩、阿波藩、北国は加賀藩、大野藩、福井藩、中国は萩藩を念頭に置いていると思われる。

大坂の緒方洪庵塾を例外として「上国」すなわち近畿「最閉塞ス」とする麴廬の判断は、自分も含め膳所藩への激励の意味が込められている。新宮凉庭（嘉永七年没）亡きあと、安政文久年間の京都の蘭学は麴廬自身も入門したことのある広瀬元恭によって担われたが、麴廬の判断を左右するほどではなかったようである。「緒方

氏和蘭ノ文ニ於ル人中ノ龍也」との評価が生まれたのは、天保九年開塾の適塾では洪庵の師坪井信道の日習堂の教育方針にならって、徹底したオランダ語原文主義が採用されたことによる。

尾州ハ吉雄伊東唱ル已ニ久シ阿州ハ淡州礮台ヨリシテ狄鞆氏ヲ募ルコト極テ盛也又幾何学ニ精シ勢州津已ニ洋船ヲ造レリ濃州大垣ハ江馬氏コレヲ以鳴ルコト数世名声四達シテ訳業ノ盛ナルコト書目ニ驗スベシ其支流又各所ニ散布シテ翻錦ノ妙手後先輩出ス越前大野ハ土田氏コレヲ主ルト云福井ト共ニ頗盛ナリ

「吉雄伊東」は尾張蘭学を代表する吉雄常三と伊藤圭介を指す。「淡州礮台」は幕命によって阿波藩主蜂須賀齊裕が文久元年に完成させた淡路島の岩屋と由良（洲本）の砲台を指すと思われる。「狄鞆」は古代中国で西方異民族の言語の通訳官の名称であったが、ここではオランダ語翻訳官を意味する。「勢州津已ニ洋船ヲ造レリ」は津藩が安政六年に神風丸を建造し、万延元年四月に初航海したことを受けている。<sup>(26)</sup>

大垣江馬家の蘭学塾を「名声四達シテ訳業ノ盛ナル」「翻錦ノ妙手後先輩出」と高く評価しているのは注目に値する。麴廬はこれを模範として膳所蘭学の人材育成を目指したかもしれない。「数世」とは前野良沢の門人として蘭学塾好蘭堂を開いた江馬蘭斎（元恭）、その子松斎（元弘）、孫の活堂（元益）の三代を指す。越前大野の「土田氏」とは藩主土井利忠の蘭学奨励を受けて適塾で学んだ蘭方

医士田龍湾である。

蓋旬服ノ地特リ江州膳所頻年一小曆ヲ出ス其社号ヲ按スルニ戴記王制寄象狄訳ノ章ニ取ル乎唯党魁ナク異蹟ナクシテ強テ朴莽ノ垌ヲ摩テ尚且鞠僂沈潜ヲ免カレサル乎

各地の洋学の現状を俯瞰したあと、膳所蘭学への概文が始まる。「旬服」は古代中国で王城を中心として五つに分けた地（五服）の一つを指す。ここで「旬服ノ地」すなわち畿内での唯一の「小曆」として麴廬が密かに自負しているのは、自分の私塾の名を冠して安政五年に刊行した『達通館配合西洋曆』である。「其社号ヲ按スルニ戴記王制寄象狄訳ノ章ニ取ル乎」と問いかける「社号」は礼記王制の「五方之民、言語不通、嗜欲不同、達其志、通其欲、東方曰寄、南方曰象、西方曰狄鞆、北方曰譯」から取られた達通館を指す（下線は引用者）。

「唯党魁ナク異蹟ナクシテ」という表現には、達通館の名を伏せたのと同じように韜晦趣味も感じられるが、むしろ蘭学停滞を打破しようとする麴廬が藩当局や門人たちに向けた檄文として読むべきであろう。「朴莽」は朝鮮の伝説的中国語通訳「朴通事」と仏教のサンスクリット語原典をインドからもたらした玄奘の両者を指すようである。そのような外国語の達人に匹敵しようとしてもかなわず、地にうずくまって沈潜する運命をたどるのか、と麴廬は問いかける。

否レハ即原田井口沢嶋松原高橋横江関□ノ輩徒ニ厝尾ヲ充塞シテ未嘗ソノ一班ヲ呈セザルハ何ゾ将タ深く自ラ韜晦スル乎抑又時利アラズシテ徒ニ鎡基ヲ止白里ニ勞スルノ類乎嗚呼コレ予ガ上国ニ嘆ズル所ナリ

原田はこの年十月『蟻鍼治要』（文久壬戌孟冬新鑣）を著すことになる原田善太郎であろう。黒田梁洲、麴廬父子の門人である。この小著は医療用ヒル（*bloodsucker*）による治療法の概説書であり、原田は「蟻鍼」に「ブルードソイゲル」の振り仮名を付けている。以下、井口、沢嶋、松原は高橋正功の「学政雜録」によって、それぞれ井口伴之助、沢嶋信三郎、横江鍼五郎に比定できよう。高橋、松原、関□は不明。「鎡基ヲ止白里ニ勞スル」とは、「雖有鎡基不如待時」（孟子、公孫丑章句）を踏まえた表現。才能があっても時の利を得なければ、不毛のシベリアの地を耕すに等しい、の意味であろう。鎡基は農具の大鋤。「上国ニ嘆ズル」の「上国」が、ここで閉塞した膳所藩を指しているのは明白である。

◎然レドモ吾寡聞ナル固ヨリ網ヲ吞舟ニ洩スモノ猶多カルベシ苟モ遺漏ヲ続編スル者アラバ其恵タルコト豈少々ナラン乎

蟻衣翼中活字于酒母楼（梵字方印）（朱印）

舟を吞み込む大魚のような大物学者の名が大勢漏れ落ちているに違いない、とは予防のための常套文句である。「蟻衣翼」は蟻の羽

のように矮小な場所、小藩膳所の比喩か。「酒母楼」は今や明らかに、行次郎のもじりである。本邦最初の新聞の版元名「蟻衣翼中活字于酒母楼」からは、小藩膳所の鬱屈した蘭学者、麴廬黒田行次郎が酒の香の匂う書齋で新聞の活字を組む姿が浮かび上がってくる。

## おわりに

蕃書調所が安政六年から刪定刊行した『官板中外新報』（製版）、同じく蕃書調所が文久二年正月および二月に抄訳刊行した『官板バタヒヤ新聞』（木活字版）のいずれも海外新聞を編集したもので、編集者の記事はない。黒田麴廬の『新聞紙の写し』（木活字版）は『官板中外新報』を抄出した「辛酉新報畧」のみならず、最新の蘭書や見聞に基づいて、海外情報、天文暦学・理学記事、洋学の現状をまとめ、自身の洋学振興への思いを吐露している。創刊号のみに終わったようであるが、発行時期（文久二年元日）からも編集内容からも、本邦初の新聞と呼ぶことが出来る。

本論で考察したように、日本洋学の現状を概観した後半の記事は、終わりに近づくにつれて膳所藩洋学の閉塞状況を踏まえた檄文の調子を帯びる。この新聞の発行とこの年四月一八日に麴廬が罪を得て諸役を奪われたことと関連があるのではないか、という推理を禁じ得ない。この処罰は本稿に利用した新史料「学政雜録」のみが伝えるもので、麴廬の由緒書にも「訳業日乗」にも明確な記載がない。処罰から約一ヶ月も立たない五月一五日に、幕府洋書調所の教授手

代あるいは訳局員に取り立ての通知が届き、麴廬は五月二三日膳所を出立することになる。洋書調所ではこの年八月、『官板バタヒヤ新聞』を『官板海外新聞』と改題して発行を継続するとともに、他の海外新聞も加えて翻訳新聞の発行を本格化した。「訳業日乗」の閏八月朔日には「ロッテルダム新聞紙日本ノ所ヲ探索セリ」の記事がみえる。

麴廬が『新聞紙の写し』を「本邦新聞紙ノ起源」として自負する背景には、蕃書調所で準備が進められていた新聞編集事業について何らかの情報を得ていた可能性がある。麴廬は嘉永初年の江戸留学時代に翻訳した『楊世夫伝』<sup>(ヨセウ)</sup>や『ロビンソン・クルーソー』が機縁となり古賀謹一郎や箕作阮甫、勝海舟らと交流したようであり、彼らを通じて蕃書調所の動きを知っていたとしても不思議でない。この間の事情や、洋書調所出仕をめぐる事情、出仕中の翻訳活動について、今後さらに解明を進めなければならない。

また、おそらく天下の孤本ともいえるべき本邦最初の新聞がなぜ、本草漢学塾の山本読書室に伝わったのか、についてもさらに調査を進めなければならない。この新聞紙を所有した山本榕室が単に海外事情の収集に熱心であったことだけに止まらない、歴史的背景があったように推測される。山本読書室資料の書簡詩文類をもとに、稿を改めて、黒田梁洲、麴廬父子と山本亡羊、榕室父子の交流関係を追いたい。

## 後記

本稿の成るにあたって、山本読書室ご当主山本和彦氏より深いご理解をいただきました。長崎大学附属図書館経済学部分館には武藤文庫資料の利用をご許可をいただきました。大津市歴史博物館の横谷賢一郎氏からは高橋正功筆「学政雑録」の存在をご教示いただきました。記して心から謝意を表します。

## 注

- (1) 小野秀雄「我国初期の新聞と其文献について」『明治文化全集第四卷新聞篇』、明治文化研究会、一九二八。
- (2) 鈴木は「バタビア新聞」(ママ)を本邦最初の新聞とする理由として、『官板中外新報』は「支那新聞の復刻版であるから本邦において最初に編輯されたものという意味においては、翻訳記事ではあるがバタビア新聞」が最初の新聞である。」と述べている(鈴木秀三郎『本邦新聞の起源』、クリオ社、一九五九、九五ページ)。
- (3) この調査は平成二四年度京都外国語大学学内共同研究費の助成を受けた。本稿が対象とする新聞は平成二三年二月二日に発見した。
- (4) オランダ語タイトル中のニュースブラット(nieuwsblad)は英語の newspaper に相当する。「新聞紙」のローマ字表記はオランダ語式であれば sinboensi、「写し」は oetsoesi、または oetesi となるべきところであるが、sinbunshi や ussi の表記には英語式の影響があるかもしれない。
- (5) 拙著『洋学の書誌的研究』(臨川書店、一九九八)第六章「黒田麴廬研究のために」、『京都大学附属図書館所蔵黒田麴廬関係資料目録』(京都大学附属図書館、一九九二)、飛鳥井雅



- 道・齋藤希史編『注釈漂荒紀事』（京都大学人文科学研究所、一九九六）参照。
- (6) 『京都大学附属図書館所蔵黒田麴廬関係資料目録』、二二―四ページの渡邊顯信による解題を参照。
- (7) 本稿は、近世京都学会第二回研究大会（二〇一三年六月三〇日、京都外国語大学国際交流会館）における口頭発表の内容を増補修正したものである。
- (8) 平田守衛編著『黒田麴廬の業績と「漂荒紀事」』、京都大学学術出版会、一九九〇、七五ページ。
- (9) 「開成所出役」の表現はこの由緒書が慶応三年に書かれたため、やむを得ないかも知れない。文久二年の段階では正確には「洋書調所出役」である。
- (10) 卓南生『東アジアジャーナリズム論』、彩流社、二〇一〇、第一章「米国人が中国で創刊した初の中国語新聞」による。
- (11) 京都大学文学部図書館所蔵の『官板中外新報』（雑一―一八）は第一号、第二号、第二巻第一号、第四号、第六号、第七号、第八号の七冊から成り、各冊「小諸文庫」印が捺されているが、奥付を欠き、第一号最終丁裏の余白に「安政六己未」の朱印を有する。鈴木秀三郎（前掲書、一六ページ）がつとに指摘しているように、『官板中外新報』の発行は安政六年から始まった。文久年間になって老皂館萬屋兵四郎が販売したものには、「発閩（ママ）目録／舶来蕃書類・官版原書類・同翻訳書類／老皂館／東都堅川三之橋／東都堅川三之橋／萬屋兵四郎」の奥付がある。
- (12) 卓南生、前掲書、二五―二六、二九―三〇ページ。
- (13) 長崎大学武蔵文庫新発見資料No. 266（辛酉新報署中之説）（縦帳断簡、1枚）<http://www.lib.nagasaki-u.ac.jp/search/ecolle/muto/eturan/> 最終閲覧日、二〇一三年六月一七日。
- (14) 判定にあたっては、黒田行元（麴廬）の自署がある明治一三年三月二五日付滋賀県令籠手田安定あて「印度学興立ニ付御願上書」に合綴された、「エ、イ、エイテル著（…）支那ノ仏学ヲ学ブ者ノ為ノ辞書（…）著述者自序」の訳稿（大津市歴史博物館所蔵）を利用した。ちなみに、その原書はE.J. Eitel, *Handbook for the student of Chinese Buddhism*. London, 1870 である。
- (15) 早稲田大学古典籍総合データベース掲載の『官板中外新報』（老皂館萬屋兵四郎発兌）第十二号 [http://archive.wil.waseda.ac.jp/kosho/i08/i08\\_00193/i08\\_00193\\_0011/i08\\_00193\\_0011.html](http://archive.wil.waseda.ac.jp/kosho/i08/i08_00193/i08_00193_0011/i08_00193_0011.html) による。最終閲覧日、二〇一三年一月二五日。なお、『日本初期新聞全集1』（ペリカン社、一九八六）に同第十二号の影印はない。
- (16) 卓南生、前掲書、二六―二七、四四―四七ページ参照。
- (17) 矢野仁一『アロー戦争と圓明園』、中公文庫、一九九〇、二〇九―二一四、二三九ページ。
- (18) 拙著、前掲書、一六七ページ。
- (19) <http://cinii.ac.jp/naid/11008433585> 最終閲覧日、二〇一三年九月二〇日。
- (20) 林子平の無人島之図は、中村拓『新装版 日本古地図大成』、講談社、一九七四、一三四ページ参照。
- (21) 『薩藩海軍史』中巻、一六〇ページ参照。
- (22) 大崎正次『近世日本天文史料』、五二〇ページ
- (23) 大崎正次、前掲書、四六四ページ。Gary W. Kronk, *Cometography. A catalogue of comets. Vol. 1: Ancient-1799*. Cambridge U.P., 1999, p. 403.
- (24) Gary W. Kronk, *op.cit.*, p. 422.
- (25) 以上は山本読書室資料に伝わる山本榕室自筆「金蟲考」による。
- (26) 『津市史』第一巻、六二五ページ。
- (27) 梵字の印文四文字（左図参照）は、*ka-ra-ksla-tra* と判読出来るが、意味は不明。朱印は草花のように見える。いずれも後



考を待つ。

梵字方印および朱印

## On the First Japanese Newspaper Published in Kyoto

Kiyoshi MATSUDA

## 〈Summary〉

In the publishing history of the Japanese newspaper, the *Kanpan Batavia Shinbun* has until now been recognized as Japan's first newspaper. Published by the Bansho Shirabesho, the Bakufu's Institute of Western Studies, in the 1st lunar calendar month of Bunkyu 2 (1862), it was in fact a series of booklets printed with wooden movable type and translated from the Dutch colonial government's newspaper, *Javasche Courant*. However, the author of this article has discovered a newspaper publication that precedes this, making it Japan's truly first newspaper. Published in Kyoto, on the first day of the 1st lunar calendar month of Bunkyu 2, i.e., 30 January 1862, this newspaper was printed on Japanese *washi* paper by means of wooden movable type. It bears the title in Dutch: *Model van een nieuwsblad of sinbunshino utssi* (Model of a newspaper or a copy of *shinbunshi*).

The author and editor of the newspaper proved to be KURODA Kikuro (1827–1892), professor of Dutch studies in the Zeze domain academy. In this article we try to clarify the production history of the newspaper and the cultural conflict between pro- and anti-Western factions within the domain, not only by content analysis, but also by investigating related documents, such as Kuroda's private diaries and those of his colleague in the academy, TAKAHASHI Masakatsu.

